

文章読解の授業が学生にもたらしたもの —言語聴覚士学科の学生たちの感想文を基にして—

林 耕司

長野医療衛生専門学校 言語聴覚士学科

Realizing Importance of Language through Interactive Reading Comprehension Classes -Based on Students' Essay at Speech-Language-Hearing Therapist Training School-

Koji Hayashi

Nagano Medical Hygiene College

要旨：筆者は言語聴覚士とはなによりもまず「言語」聴覚士であり、「言葉とはなにか」と常に自身に問いかける職業であると考えている。従って、文章読解の授業を展開するに当たっても「言葉とはなにかを考えること」に焦点を当てた授業が望ましいと考えてきた。そのような考えの基、2020年度前期・15回（1回90分）の授業を実施したので報告した。授業では学生は「新聞連載記事ことばってすごいね・コミュニケーション障害者やその家族の手記や願い・言語聴覚士の行っているコラボレーションセラピーや演劇の論文」などを読み、感想を書き、発表した。そのなかで学生たちは言葉とは何か、言葉の障害がもたらす問題点とは何か、言語聴覚士の専門性とは何かということを広く深く考えるようになっていった。

キーワード：文章読解 授業 言語聴覚士 学生 言葉 感想文

1. はじめに

文章読解の授業を進めるにあたって、授業の焦点を「言葉とは何か」を考えることに当て、2020年度前期の授業15回（1回90分）を2年生に行った。筆者は言語聴覚士（以下、STと略）とは常に「言語」聴覚士であり、「言語とは何か」絶えず考えている者であると考えている。ST学科の学生の時代から言葉について考え、自分に普通に備

わって何気なく使いこなしている言葉を深く掘り起こし耕していくことが学生自身を大きく成長させ、ひいてはその成長がSTとして臨床の場に立った時に言語障害児者やその家族への希望ある支援へと結びついてゆくのではないかと考えてきている。文章読解の授業では新聞に取り上げられた言葉についての記事や言語障害者や家族が書いた文章、STの書いた論文などを取り上げることと

した。また、学生が実際の患者様のイメージを拡げるために失語症患者たちが演じる演劇DVDを鑑賞した。

2. 文章読解の目的

以下の5つを目的とした。

- ①「言葉がもたらす力」を考える。
- ②「言葉とは人間にとってどんなものなのか」を考える。
- ③成人のコミュニケーション障害者（主として失語症者・自閉症者）やその家族の気持ちや希望を知る。
- ④STがリハビリテーションの中でとるべき役割を考える。
- ⑤読解した文章の感想を口頭で発表し、他者の意見を聴き、自分の考えを文章にまとめる力をつける。

3. 実際の授業展開

具体的には以下に記すような授業展開を考えて実施した。①まず、産経新聞に“言葉ってすごいね”という題の下で5回に亘って連載された言葉の力を信じる5人の方たちの記事を読み、言葉の力ってなんだろうと広く深く考える。②次に、自閉症スペクトラムや失語症、運動障害性構音障害を呈した当事者の方たちやその家族の手記や訴えを読み、言葉の障害とは何だろう、言葉の障害がもたらすものとはどんなものだろう、その願いや希望とは何だろうと考える。③そして、STは具体的にどんな支援をしているのか、どんな支援ができるのか、筆者が展開している具体的方策を書いた論文や読売新聞連載の6回シリーズ“支える言語聴覚士”を読んだり、テレビ放映された失語症友の会の演劇をDVDで観たりして考える。④最後に、言葉ってなんだろうと改めてもう一度考えるために“言葉”についての哲学的考察を読み、STの仕事や言葉というものを大きく捉えなおす。ということにした。

授業では読解した文章の感想や意見を各自が発

表し、筆者が感想や解説を加えた。そして、授業後に感想や意見を自分なりにまとめて提出させた。

4. 言葉ってすごいね（産経新聞連載）^[1]の記事を読んで考える

産経新聞に2014年1月1日から5回に亘って掲載された“言葉ってすごいね”という記事を5回の授業に亘って読み考えた。その5回の記事の内容は言葉の力を信じる人たちの5つの話①低酸素脳症で言葉を話せなくなった12歳の少女の物語②聴覚障害の弁護士の物語③言語聴覚士の物語④コピーライターの物語⑤漫画家の物語である。以下、1回ごとの記事から読み取れた言葉についての話とその記事に対する学生の感想を記していきたい。

4-1 低酸素脳症で言葉を話せなくなった12歳の少女の琴音さんの物語

森琴音さんは文字盤を指さしながら会話する。しかし、音声で話すことができない。彼女が書いた詩「わたしの願い」には“神様が1日だけ魔法をかけてくれたら・・・家族といっぱいおしゃべりしたい”と書かれている。彼女には肢体不自由もあり一字一字指さすのに時間がかかる。STから見ると文字盤というAAC（拡大・代替コミュニケーション）が使えていてコミュニケーション活動が保障されていると思えるのだが、言語障害を持った琴音さんの側からみると音声で直接家族に“ただいま”“おやすみ”って伝えたい願望がある。普通に話している普通の言葉がどんなに大切なものかわかる話であった。

◎学生の感想文から

○この記事を読んで、「魔法がとける前におやすみっていう」「普通の事をしゃべれたらそれでいい」という部分に胸がいっぱいになりました。当たり前前にできている「しゃべる」という事、実はとても幸せな事だと思いました。

○みんなの感想を聞いて、自分の視点、琴音ちゃんの視点、家族の視点と、様々な視点で見ている

ことが分かりました。私は自分視点でしか見ていなかったの、他の人の視点も大切にしようと思いました。

○家族と医療従事者の関わり方が患者さんに大きな影響をもたらすと思った。家族の不安を取り除くことや信頼関係を築くことがリハビリテーションにおいて大切だということに改めて気づいた。

4-2 聴覚障害の弁護士の田門さんの物語

生まれつき耳の聞こえなかった田門さんは司法試験に挑戦し8度目で合格し、職に就くのに高い壁があったが、今は依頼者とは通訳を介してスムーズな会話をしている。そんな田門さんにとって言葉とは「人のためになる道具」であり、相手の微妙な表情やしぐさを通してコミュニケーションがうまく進んでいるかを判断している。彼にとっては「聞こえないことは当たり前のこと」であり、「人と人が分かり合うためにはコミュニケーションは本来時間がかかる」ので「心のゆとり」を持つことが大事とゆったりと構えている。そして、「障害があってもなくても、人間には本来、何でもできる力がある」と信じている。障害は田口さんのように挑戦するおおせいな意欲のある障害者にとっては障害ではないという事実はSTにとってとても大切だ。障害を持つ人がすべてかわいそうで助けを必要とする弱者ではないと心に留めて柔軟な臨床を展開していくことも必要とされている。

◎学生の感想文から

○コミュニケーションには時間のゆとりが必要だ、という考えを知って、おそらくスピードが重視される風潮はまだまだ続くと思うけれど、自分が言葉を使って人に関わる場面では忘れたくない考え方だと思いました。

○耳が聞こえないからといってその人が不幸であるということはないのだと思いました。障害の有無ではなく、その人がどう行動しどんな人生を選択するかによってその人の幸せは決まるのだと思

いました。

○仕事場を選ぶ際には39件も断られてしまい、社会がいかに障害者に対して寛容でないかがわかりました。これからSTとして働いていく者としてどうやったら社会から障害者に対しての差別や偏見を無くしていけるか考えなければならぬと思いました。

4-3 言語聴覚士の林さんの物語

ここでは残語しか表出できない重度失語症者を担当した言語聴覚士(筆者)の臨床家としてのありようが描かれている。言葉の源泉に立ち帰って失語症になられた方が何を言いたいのかということを探ろうとする大切さやことばがなにげなく使われている実用的コミュニケーション場面のなかに重度失語症の方を置いてあげることでコミュニケーションがとれるようになっていくことが述べられている。また、筆者が勇気づけられた言葉として祖父からもった「耕司はもう心配ない」という言葉があげられ、人を勇気づける言葉はシンプルなものでもあると述べられている。

◎学生の感想文から

○言葉は内側から湧き出てくるもの、という表現を目にして、表面的にみているだけではわからない患者さんが本当に伝えたいことをくみ取る技術が必要だと思いました。

○言葉が発せなくなっても、感情が消えるわけではなく思っていること、言いたいことはたくさんあるのだからそれを忘れてはならないという他の人の意見を聞いてハッとさせられました。

○「相手の真意を組み取る」為には、患者様の視点で考えることが必要だと思いました。1つ1つの言葉、言葉以外の表情・仕草などもよく見て、患者様と関わっていく事で、裏に隠された気持ちを組み取る事につながっていくと思います。その上でこちら側が場を提供したりすることが必要だと考えます。患者様が自信をもち、自分らしく生きられる居場所を作ることは本人や家族の力になるだ

けでなく、同じような苦しみを抱えた方に勇気を与えたいと思います。

4-4 コピーライターの岡本さんの物語

コピーライターという言葉はまだ世間には浸透していないが、コピーライターとは「ごく短い一言で、企業や商品の魅力を伝える」職業と紹介されている。岡本さんのように相手をとことん好きになって相手の魅力を簡潔な言葉で表現できればコミュニケーションはさらに豊かになるだろう。SNS上では言の葉が人の心を傷つける言の刃になっている時代である。みんながコピーライターになってほしいと岡本さんは願っている。

◎学生の感想文から

○マイナスな言葉よりもプラスの言葉をたくさん探して、使うよう心掛けて生活します！すぐには身につかないと思いますが、気長に頑張ろうと思います。

○相手を元気にできることばがいいなあ！

○「正直な言葉が多くひとの胸を打つ」という言葉が印象に残りました。また、言葉ってすごく短くて簡単でも相手には伝えたいことがちゃんと伝わるんだなと思ひすごいなと思いました。同時に短くて簡単なことばで相手を傷つけることもできるんだなと思ひ怖いなと感じました。

○「相手を心底好きになれば、コピーは勝手に生まれる」という言葉に、頭で一生懸命に考え出すのではなく、言葉は生まれてくるものなんだな、とても心に響きました。

4-5 漫画家のやなせたかしさんの物語

アンパンマンの作者やなせたかしさんはアンパンマンマーチの作詞も手がけている。その詞の冒頭には「なんのために生まれて なにをして生きるのか」「そううれしいんだ 生きるよろこびたとえ胸の傷が痛んでも」とある。戦争体験を基にできた詞ということだが、体験を基に言葉で生きる意味を考え、生きるよろこびを感じていくことの大切さを語っているようだ。また、戦争で価値観がガラッと変わった体験から逆転しない正義とは「献身と愛」であるとはっきりと悟り、目の前の困った人には一片のパンを与えたいと考えていた。そんな背景があつて自分の頭を食べて下さいとさし出すアンパンマンが出来上がったのだと思うとアンパンマンが一層いとおしい存在に思えてきた。

◎学生の感想文から

◎学生の感想文から

○昔から大好きだったアンパンマンの背景には、やなせたかしさんが戦争で体験した出来事があることに驚きました。(中略) 今アンパンマンの歌詞を改めて思い出してみると、シンプルでまっすぐな言葉だからこそ元気がでるし、考えさせられるなと思いました。またわたしの好きな歌詞は「さびしくなったら愛すること愛することをすてないで」です。わたしはこの歌詞の中で愛することは生活していく中で自分の周りの人や、時には自分にも思いやりを持つことだと考えました。

○全ての人の心に届くような言葉をやなせたかしさんは遺した。みんな同じ言葉なのに何が違うのだろうか。言葉とは使う人によって、棘があるものにもなり、人を救うこともできて面白いものだと思う。そんな言葉を話せるようにリハビリする言語聴覚士はやっぱりすごいかっこいい仕事だと改めて感じた。身近なところに落ちているいい言葉をこれからも見つけて、誰かの支えになる言葉をかけてあげられるような言語聴覚士になりたいなと思った。

5. コミュニケーション障害者とその家族の手記や願いを読んで考える

自閉症スペクトラムや失語症、運動障害性構音障害を呈した方たちや家族の手記を読み、言葉の障害とは何だろう、言葉の障害がもたらすものとはどんなものだろうと障害をもった方たちや家族の思いから考える。

5-1 失語症・運動障害性構音障害

5-1-1 自由への道標^[2] (橋本卓於)

18歳の時に失語症に見舞われ4年後に大学に入った橋本さんが書いた自分自身の失語症を分析した著作を読んだ。その記載は具体的だ。たとえば、カネ（金）がハネ（羽）に聞こえてしまい、「カだよ。カ、カ、カ」と一音で相手に言われるとさらに混乱する。また、「氷を入れた冷たい水を飲みたい」と言うことは気の遠くなるほど難しく複雑な文だという記述にははっとさせられるものがある。

◎学生の感想文から

○氷の入った水が欲しいという話がとても印象に残りました。氷のない水を渡され首を振ると何が欲しいの？と聞かれてしまう。しょうがなさそうに飲むと相手も嫌な顔をしてしまう。「水を飲む」という些細な行為にも、その裏には氷が欲しい、とかお気に入りのコップで飲みたいとか色々な思いがあるのだと思いました。

○コップに入った水をイメージすることもあまりなかった段階から、「氷を入れた水が飲みたい」というイメージの伴った要求になっていき、それでも口で説明するのは困難であるという、生活の中での具体的な困難点を知ることができました。

○健常者では言語音が聞こえると同時に聴覚系の回路がすぐに立ち上がるが、失語症者ではその立ち上がりの時間を必要とするのではないかという記述があり、今まで失語症の方を見るたびにどうして言葉がこんなにも障害されてしまうのかと不思議だったが、この文章を読んで腑に落ちた。

○「最初の発話の聞き取りが悪いということは、聞くという姿勢が十分に取れていなかった…」というのを読んで、患者さんと関わる際は、様子をしっかりと確認し、声掛けなどをしなければならぬと思いました。

○「失語症の方は自己不完全感という心理的爆弾を抱えている」「自分が了解しえた意味が、適正なものかどうかという不安である」ということを理解する事が大切だと思った。

5-1-2 失語症患者の気持ち^[3] (田村利男)

失語症ボランティア講座で話されたこの講演原稿には「倒れた当初の十日間、入院当時の5か月間、自宅療養の1年4か月間、社会復帰後の1年2か月間」のことが書かれている。専門的には急性期、回復期、維持期といわれる期間を失語症患者がどのような気持ちで生きてゆくのかを知ることがS Tにとってとても重要なことであり、その一端を知れたことが学生に刺激を与えていた。また、どんなS Tと出会うのかは患者さんがどう生きていくのかにもつながっており「養育院のリハビリがなかったら、私の運命はもう少し別のものになっていたかもしれません。遠藤先生との出会いは、素晴らしいの一語に尽きるといっても過言ではないと思います。」と述べられている。そして何より治してみせるぞという執念や意欲が必要だが、冗談を言うとか、ゆとりも必要だということに言及されていた。

◎学生の感想文から

○田村さんの「自由が欲しければ、自分自身でやるしかない」この言葉も響きました。やりたい事があつたらそれに向かって努力をするしかない。今の自分たちに向けて言われている気がしました。

5-1-3 失語症と共に生きて:21年間の光と影^[4] / 失語症者にとってよい環境とは: ボランティアさんへの願い^[5] (土屋良秀) / 失語症者が求めている介護^[6] (柳沢正治)

ウェルニッケ失語症を呈した土屋さんのこの二つの講演はいずれも失語症ボランティア講座でなされたものだ。失語症によって生じた影は、多くの仲間との心の通い合いを通して光に変容する。また、よい環境をつくるためには①ゆっくりその人と関わり、その人をよく知っていく。②見守る「間」を大切にする。③言葉だけではなく表情や身振りもひっくるめてまるごと理解する。ということを中心に話されている。

ブロカ失語の柳沢正治さんは「失語症者が求めている介護」の講演を「失語症になったことはい

のちを失ったようなものだから、私の言葉をいのちを救うような気持ちで聴いてもらいたい」という言葉で締めくくっておられる。言葉はいのちに直結しているという明確なメッセージもSTはきちんと受け取っていかなくてはならない。

◎学生の感想文から

○「間」の大切さを改めて感じました。私が保育実習先に行ったとき、どこまで支援していいのかわからず、つい手を出してしまうことがありました。その時に実習先の先生に「それは自分で出来るから見てれば大丈夫だよ」と言われることがありました。この文を読んで誰に対しても「間」を作って見守ることが必要だと思いました。この時は自分が末っ子で自分より年齢が小さい子と関わってこなかったから、もっとそういう体験を積んでおけばと思っていたけれど誰に対しても必要なことなんだと今は思っています。

○「多くの方と一つの目標に向かって協働すると影(コミュニケーション障害)が深い感動を持つ光に変わります」という文がありました。それを読んで、障害があるからと臆さずに、様々なことに参加していくことが大切だと思いました。そのためには、大変な時に支えてくれ、理解してくれる仲間や、失敗してもいい環境などが必要だと思います。当事者同士で語りあえる場を作ることも、言語聴覚士の仕事と聞いたので、場を作ることも大切にしようと思います。

5-1-4 構音障害になって^[7] (山崎進)

コミュニケーション障害集中講座で話された山崎さんは53歳で発症し右片麻痺をきたし、59歳で再発し運動障害性構音障害が加わった。開鼻声と嗚声が主たる症状であるが、発する音はすべて鼻に抜けてしまうので聞き手が理解するのはとても難儀である。そんな彼の発音を聞いただけでびっくりして逃げ出す店員さんがいたり、地域の集会では敬遠されてしまったりと、社会に出ていくには心の壁(無知と無関心による偏見と差別)と

いうバリアー(障壁)が高くて疎外感を覚えている。

◎学生の感想文から

○昔、駅で困った顔をしてウロウロしている日本人に声を掛けたら、なんと日本人顔なのに日本語が全く喋れない人(英語がペラペラでした…)で、とても焦ったのを思い出しました。こちらからすると、相手は日本語が不自由な人ですが、相手から見た私は、英語が不自由な人です。不自由同士、ワタワタして、なんとか頑張って問題解決しました。私としては楽しかったのですが、とても疲れたので二度としたくない経験です(笑)でも、山崎さんをはじめ、失語症・構音障害の方々が求めているのは、そういう世界なのではないかと思います。話しかけたら、相手は話せなかった、だからフェードアウトしていく。のではなくて、話しかけたら話せなかった相手に、どう伝えてもらうか、どう伝えるかを一緒に探して見つけていける、そんな関わりがとても重要だと感じました。

○土屋さんと山崎さんにとって、STや家族やボランティアがとても支えになっているんだという印象です。そして一人の人間として扱って欲しいという切な願いが受け取れます。先生に習ったこととして頭に入っていましたが、こうしてご本人様の声を聴くと、より心に伝わりました。心の支えになるようなSTになりたいです。

○失語症・構音障害共にあまり世間に認知されておらず周りとの関わり方に苦勞していることが分かりました。山崎さんの「無知と無関心による偏見と差別」この言葉には考えさせられました。

5-1-5 夫はバイリンガル失語症^[8] (ロコバント靖子)

日本語教師の妻が失語症になったバイリンガルの夫の失語症状や言語生活をつぶさに観察し記した本である。妻の視点から書かれた貴重な記録である。

◎学生の感想文から

○「リハビリの現場に同席して初めてそれとわかるのが障害の実際」という文を読んで、家族や、患者様の一番身近な人に、リハビリの現場を見ていただき、何が苦手かどうか配慮すれば良いのか、知ってもらふことが必要だと思いました。

○脳に血液が流れ込むことを、「大地は芽吹き、花咲き、虫が飛ぶ美しい命の通う世界に変化した。」と自然現象を用いて表現しているのがなぜかとてもしっくりきました。

○改めて家族や周りの方の支えが大切だと思いました。筆者の方は失語症について自ら考察し調べたりして理解したり、病院を退院した後のリハビリ病院を探したり、夫の職業について考えたりと支えていました。こんなに支えられるのはとてもすごいと思うと同時にみんながみんなそう出来るわけではないんじゃないかと考えてしまいました。医療従事者が家族の方に分かりやすく説明したり、患者さんに温かく接する姿勢を見せていくことが大切なんじゃないかと思いました。

5-2 自閉症スペクトラム障害

5-2-1 自閉症の僕が飛び跳ねる理由^[9] (東田直樹)

アスペルガー症候群の当事者研究^[10] (綾屋紗月)

東田さんの本を読んでもみると、彼が急に飛び跳ねたり、奇声を上げたり、しゃべれなかったりする理由がはっきりとつかめ彼の行動を理解し支援する手がかりがつかめる。やはり理解した上で支援していく姿勢が必要なのだと思う。

綾屋さんの話を読んでもみると感覚というものがいかに大事かがわかってくる。たとえば彼女には空腹感といったものが生じないらしい。だから時計時間に合わせて昼 12 時になったらお腹がすいたことにして食事をしているとのことだった。

同じ自閉症スペクトラムに入るお二人であるがその特徴的的症状は全く異なっているようだ。このように当事者が書く特徴的な症状を深く理解して

いくのもまずは専門家の仕事の一つといえよう。

6. STがめざすコミュニケーションセラピー論を読んで考える

6-1①楽しみの極北をめざすコラボレーションセラピー：コミュニケーション障害者やその環境と協働し、響同するSTの役割^[11]

②失語症演劇から立ち上がるもの^[12] (筆者)

①の論文では「STはコミュニケーション障害者とそれを取り巻くコミュニケーションパートナー(家族・専門職・ボランティアの方々)と協働し、心を響かせ合いながら具体的・実践的にセラピーを展開し、良い環境を創り上げていかなければならない。そのために4つの具体的方策を展開している。その4つとは①芸術活動を通じた楽しみの共有②会話パートナーの養成③コミュニケーション障害者を取り巻く専門職への教育④失語症友の会の支援である。という論が展開されている。

②の論文では失語症演劇では練習から本番にかけて「狭い意味での言語治療をはるかに凌駕して、広い意味でのコミュニケーション訓練がダイナミックになされている」とみなされ、その演劇が成功するために必要なこととして具体的に演劇ワークショップを行っていくことが重要であることが示されている。

また、この2つの論文に次いで「支える言語聴覚士」という読売新聞に6回に亘り連載された記事^[13]を読み、「誤嚥防止・地域の失語症サポート・ゲームを通じた訓練・補聴器の選定・子どもへの発音指導」を行っている実際を知っていき、「STの認定制度でSTの質を確保している現状」をも学んでいった。

◎学生の感想文から

○コラボレーションセラピーという言葉を知り、とても興味を持った。そして、改めて言葉のリハビリはSTを主体として行うがSTが全てではないと考えた。患者さんにとって一番話したい人はSTではなくて家族や友人であり、STはそれを

サポートするという事を考えさせられた。

○言葉が苦痛にならないようにリハビリするのに言葉しか使わないのは何か違うと考えていた私の考えの中に芸術という観点はなかった。芸術を使い楽しく言葉が話せるようになるという可能性を知れてよかった。

○会話パートナーを簡単に養成できるわけではないが、患者さんや家族にとってはとても重要だと思った。「周囲の人々のもたらすゆったりした対応や、何気ない笑顔が病をもった人にどれだけの勇気を与えるか」とあるように聞き手のこのようなかわりが、今後の生活の側面の支援にもつながると思う。自分はそういった関りが出来るようになりたい。

○「成果は患者さんだけではなく周りの人々にどれだけの生きる満足や笑顔をつくり出せたか」とあって言葉を発することができたからいいやだけではなく、日々の暮らしの中で生き生きと過ごせるかも考えないといけないと思った。

○STが患者さんの環境を整えて、コミュニケーションの架け橋になる必要があると感じました。

○演劇は訓練室ではできない様々な訓練が取り入れられていると思った。「話すスピード」「間の取り方」「身振り・しぐさ」「全体の中での自分の位置」など考えることが多いと思う。演劇は多くの可能性を秘めていると思った。

7. 学生が文章読解の授業で考えたこと

最後に改めて言葉の不思議、言葉とは何かを考えてもらうために哲学者の池田晶子書いた「言葉」^[14]を読み授業を終えた。

以上のような 15 回の授業の中で学生には様々な気づきや学びがあったと考えられる。文章読解の目的として「ことばがもたらす力」を知るなど 5 項目を挙げたが、全体を通して言葉とは何か、言葉の障害が何をもたらすのか、STの専門性とは何かということがおおまかにつかめたのだろうと思う。学生から感想文で出てきたキーになること

ばを基にSTの仕事を考えてみると「臨床では言葉以外の表情や仕草からも患者様のところをよみとる技術を磨き、正直なまっすぐな言葉が胸を打つということを胸に置いて、自己不全感を持つ患者様の気持ちに寄り添い、患者様が意欲的に生活できるように取り組み、居場所作りにも貢献したい。そして、コミュニケーションには間やゆとりが必要と考えながら、社会的には患者様に対する偏見と差別を取り除くように努力していきたい。」ということになるだろう。

学生たちからの反応でなるほどそうなんだと考えさせられたのが「他者の意見を聞いて、自分とは違う様々な意見があることを知れてよかった」という感想だった。じっくりと他者の意見を聴いて幅広い見方ができるようになるということは成長のために必要なことだと思われた。意見を言うに当たっては哲学カフェで行われている次の5つの対話の原則^[15]「①結論をださなくていい。②誰が正しいのかを決めない。③何を言ってもいい。④人を批判しないし否定しない。⑤互いを尊重する。」を採用し、重要なのは「話す」ことよりも「聞く」ことという態度で授業に臨んだ。コロナ禍の中でオンライン授業も何回かあり、資料や感想文やそのフィードバックなども簡便に即 web 上でやりとりできたことも良かったと思われる。授業全体のまとめの感想としてある学生は次のような感想を書いてきている。

◎学生の感想文から

○ことばについてたくさん考えました。私は当初、言葉はコミュニケーションの道具という考えでしたが、この授業を受けていくうちに変化しました。言葉は自分を表すもの、自身そのもので、他人との関わりがなかったとしても、自分と関わるために必要なもの、という考えがしっくりきます。私たちが普段何気なく過ごす日常は言葉によって支えられているということを感じました。

○私は、自分の意見を言うのがとても苦手です。

これを言ったら相手はどう思うのかとか考えすぎてしまうことが多くてなかなか言うことができませんでした。しかし、今回この文章読解の授業を通じて、人それぞれ違う意見や感想があって、間違いは一つもないと感ずることができました。授業では前に立って感想や自分の意見を言う機会が沢山あり、発表していく中で今までより自信を持つことができました。言葉とはものすごい力を持っていて、これから生きていく中で自分の気持ちは常に丁寧に伝えていきたいと思ひます。

また、障害を持った方々の気持ちに少しでも寄り添ひ、何が今自分にできるのか、求めていることは何かといったことを考えていくことが大切だと感じました。何よりも、会話や生活の中でお互いに尊重し合って生きていかなければいけないと心から思ひました。そして、STになった時どのようなSTになりたいか考えるいい機会になり、林先生のおっしゃっていた情緒を持って患者さんを支援するという言葉だったり、言葉の源泉は心を探るということだということを知り、STがリハビリをしたり支援をするのは当たり前で、その過程の中でいかに患者さんとの信頼関係を築いていくためには、情緒を持って患者さんと向き合っていくことなのかなと感ずることができました。また、「STを楽しむ」という言葉が心にとても響いてきました。

ふと、支えられたシンプルな言葉について考えてみました。私が今まで生きてきた中で支えられている言葉で今ぱっと思ひつくものがなくて、なのでこれからの人生の中でそう言う言葉に出会うことができたらいいなと強く思ひました。「ことば」って不思議なものという気持ちを忘れないようにしたいです。

8. 今後の授業展開に向けて考えること

読書らしい読書をするのが極めて少なくなってきた学生たちに読解の授業を展開する難しさを感じる。しっかりと読解力を身につけるため

には成書 1~2 冊をじっくり読んで味読し考える力を養うことも必要だろう。また、日々の新聞を読んで活字を読むことに慣れ親しんでいくことも必要だと思われる。筆者の授業は読解を通して言葉の力に触れるということに重点を置いた。読解そのものを鍛えるために評論や随筆・小説などを読むという授業も考えられはするが、あくまでも読解を通して言葉や言葉の障害を考え、それを土台にコミュニケーション障害の専門科目の勉強をしていくということが大事なのではないだろうかと思ひている。言語や言語障害にまつわるさまざまな書物や記事を読み取り、感想を口頭で発表し、他者の意見も聞いた上で自分の感想・意見をまとめて書くという一連の作業が学生の考えを深めることにつながっていくと思ひている。

謝辞：本実践報告をまとめるに当たっては学生が提出した感想文を引用した。しっかりとした感想文を書いてくれた学生たちに感謝する。

文献

- [1]産経新聞：ことばってすごいね.1月1日~1月5日,2014
- [2]橋本卓於：自由への道標.橋本卓於遺稿集,1-43,1993
- [3]田村利男：失語症患者の気持ち.再起への道.日本聴能言語士協会,97-117,1982
- [4]土屋良秀：失語症と共に生きて-21年間の光と影-.ボランティア講座資料,2006
- [5]土屋良秀：失語症者にとってよい環境とは-ボランティアさんへの願ひ-.ボランティア講座資料,1999
- [6]柳沢正治：失語症者が求めている介護.ボランティア講座資料,1999
- [7]山崎進：構音障害になって.コミュニケーション障害集中講座資料,2000
- [8]ロコバント靖子：夫はバイリンガル失語症.大

修館書店,2013

[9]東田直樹：自閉症の僕が飛び跳ねる理由.エスコアール,2007

[10]綾屋紗月:アスペルガー症候群の当事者研究.第4回障害学会報告,2007

[11]林耕司：楽しみの極北をめざすコラボレーションセラピー.聴能言語学研究,19(3):236-241,2002

[12]林耕司：失語症者による演劇から立ち上がるもの.地域リハビリテーション,9(4):284-288,20141

[13]読売新聞：医療ルネサンス 支える言語聴覚士.6月17日～24日,2019

[14]池田晶子：14歳からの哲学.トランスビュー,24-37,2003

[15]中島隆博編著:ことばを紡ぐための哲学.白水社,34-57,2019

受理日：2021年2月17日